

二ツ梨横川1号窯跡

団体営二ツ梨土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989年3月

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、石川県小松市二ツ梨町に所在する、二ツ梨横川1号竈跡の灰原の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、団体営二ツ梨土地改良事業（圃場整備）に伴うもので、市農務課より小松市教育委員会が依頼を受けて実施したものである。
3. 発掘調査は、昭和63年10月15日から10月26日にかけて行い、宮下幸夫が担当し、櫻田 誠・石田和彦の協力を得た。
4. 出土品整理及び報告書作成は宮下・望月精司が担当し、下記各氏の協力を得た。

〈遺物の洗浄・記名・復元〉	打田外喜代、伊藤節子、山口美子、金森和美、若山智賀子 成毛覚美
〈遺物の実測・トレース〉	宮田佐和子、江野直子
〈遺物の拓本〉	打田外喜代
〈遺構のトレース〉	石田和彦、江野直子
5. 報告書の編集及び執筆
本書の編集は、小村 茂指導のもと、宮下・望月が担当した。
執筆は、第1章を石田が、第2章・第3章を宮下が、第4章を望月が担当した。
6. 本書で示す方位はすべて磁北である。尚、第1図の周辺の遺跡には、国土地理院発行2,500分の1地形図（昭和62年発行「小松」「動橋」）を使用し、第2図の調査地位置図には、小松市発行2,500分の1国土基本図（昭和59年度修正「二ツ梨」「那谷」）を引用した。
7. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体から御協力と御指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略 50音順）
北野博司、木立雅朗、田嶋明人、近間 強、土屋宣雄、出越茂和、福島正実、吉村洋志
石川県立埋蔵文化財センター

目 次

例 言		
第 1 章	位置と環境	1
第 2 章	調査に至る経緯と調査概要	4
第 1 節	調査に至る経緯	4
第 2 節	調査概要	5
第 3 章	遺 構	6
第 4 章	遺 物	10
第 1 節	器種の構成比率	10
第 2 節	各器種の検討	11
	(1) 蓋 坏 (2) 無台坏 (3) 無台皿 (4) 有台皿	
	(5) 高 坏 (6) 盤 (7) すり鉢 (8) 長 甕	
	(9) 小 甕 (10) 鍋 (11) 短頸壺 (12) 小 壺	
	(13) 長頸瓶 (14) 双耳瓶 (15) 横 瓶 (16) 甕	
	(17) 甕形土器	
第 3 節	窯詰め方法	26
第 4 節	編年の検討	27
おわりに		34
出土須恵器観察表		35
写真図版		1~6

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	2	第11図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	16
第2図	調査地位置図	4	第12図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	17
第3図	グリッド配置図	5	第13図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	19
第4図	土層セクション配置図	6	第14図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	20
第5図	灰層範囲図	7	第15図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	22
第6図	土層セクション図	8	第16図	須恵器甕胴部叩き目文分類図	23
第7図	土層セクション図	9	第17図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	24
第8図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	12	第18図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	26
第9図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	13	第19図	供膳器口径変遷表及び法量分布図	28
第10図	二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器	15	第20図	奈良時代中頃の須恵器窯跡編年図	29

第1章 位置と環境

石川県の加賀地域は白山大汝峰に源を發し、美川で日本海に注ぐ石川県最大の河川である手取川により北加賀と南加賀に分けられる。いわゆる南加賀地方は、西に日本海、東に白山前山地帯を形成する能美・江沼丘陵にはさまれた狭延な地域で、南西で福井県に接した江沼盆地と、これに連続して東北方に広がる能美平野からなる。

この江沼盆地と能美平野の中間位置に、柴山湖・今江湖・木場湖（今江湖の全面と柴山湖の4割が干拓により消失）からなる加賀三湖と、これによって形成された潟埋積平野が広がり、東南を白山前山地帯と境を接し、いたるところで小谷を形成している。本遺跡は、これらの小谷の中の、二ツ梨町より那谷町へ抜ける通称オオダニ中程の東側斜面に位置する。

本遺跡が所在する南加賀古窯跡群は、白山前山地帯のうち、江沼盆地の東端をなす動橋川及び、加賀三湖の木場湖に注ぐ馬場川の開折により形成された、標高40～100mの低丘陵地帯に存在する須恵器・埴輪・土師器・甕器窯跡及び製鉄址を総称したもので、県下最大の規模をもつ。

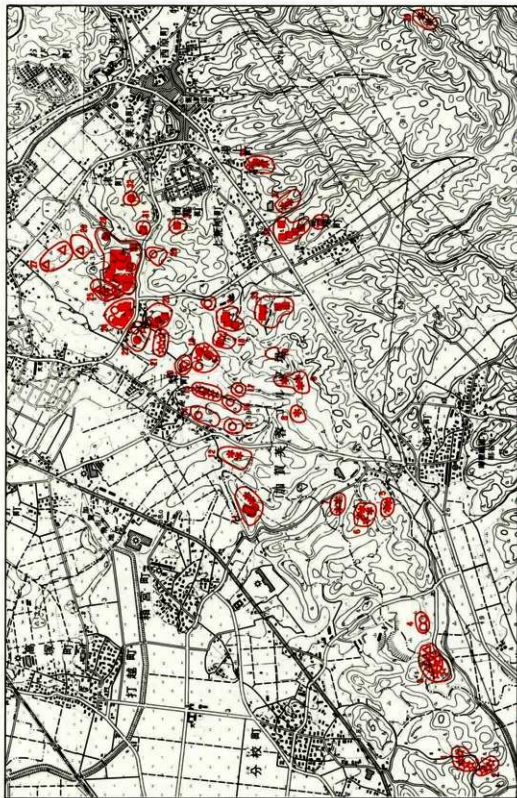
南加賀古窯跡群は、古墳時代後期において生産が開始される。二ツ梨東山4号窯(15)は、6世紀前半のものとして推察され、当古窯跡群において発掘調査が実施されたもののなかでは最も時代が古い。また、二ツ梨トノサマイケ(21)では埴輪兼業窯が営まれ、三湖台に所在する古墳へ供給されている。6世紀代では、この二ツ梨地区と、南加賀古窯跡群の西端部を占める松山・分校地区及び那谷地区（那谷川水系域）で操業がなされている。

8世紀に入ると、当古窯跡群での生産活動が最盛期を迎える。窯跡分布は極めて広範囲にわたり、拡散的である。二ツ梨地区では、本遺跡を始め5カ所で新たに操業が開始する。一方、この時期を最後に那谷川水系域での窯業生産が終了するなど、後半には収束・統合の傾向を見せる。

この傾向が9世紀には顕著に現われ、生産規模は縮小していく。窯跡分布も、箱宮地区(11)で新しく操業が開始する以外は、ほぼ戸津地区及びそれに隣接する二ツ梨地区に限定される。

10世紀に入っても、窯跡分布には新たに上荒屋地区を加えるほかに変化は見られないが、生産量は爆発的に増加し、再び盛期を迎える。特に、戸津(28)では生産活動全盛期で、当時期の窯跡が20基以上検出される。また、各地区で瓦の同時焼成が見られる。

当古窯跡群での須恵器生産は、10世紀を最後に見られなくなり、代わって甕器系陶器（加賀古窯製品一加賀古陶）の生産が行なわれる。平安末期頃に始源が求められる加賀古陶は、過去の須恵器生産地とはほとんど重複しない地域にその分布を見ることが出来る。生産の中心も時代が下るとともに、二ツ梨奥谷(9)から那谷地区へ、14世紀には遠く隔てた上荒屋地区、さらに西荒谷(39)へと移動し、生産は終了する。



No.	黨 跡 群 名	備 考	No.	黨 跡 群 名	備 考
	那谷川水系域				
1	分校	1972 大聖寺高校郷土研究部調査 (1～3号黨)	23	二ツ製(マメオカ ムカイヤマ)	1983 小松市教委調査(1～3号黨 灰原部分), 瓦陶事業黨
2	松山		24	＊ 一貫山	1970 小松市教委調査(1・2号黨) 土師器黨(8・9号黨)
3	那谷金比羅山	1982・83・84 県立埋蔵文化財センター 一調査	25	戸津六字ヶ丘 林オオカミダニ	1985・86 小松市教委調査
4	＊ 桃の木山	1978 小松市教委調査	26	＊ タカヤマ	
5	＊ カミヤ		27	戸津(シンプヤワ・トズ)	1974 県・市・戸津古黨跡調査委員 会調査(5号黨)
6	＊ 大天王谷	1973 小松市教委調査	28		1975 小松市教委調査(9号黨)
7	＊ 小天王谷	1969 北陸大谷高校地歴クラブ調査	29	＊ オオタニ	1981～84 小松市教委調査(須恵器 黨24基, 土師器黨18基, 地下式平黨 築器系黨1基, 灰黨1基)
8	＊ (カナクノダニ)	1969 〃	30	＊ (アナヤマ)	戸津2号黨 北陸大谷高校地歴ク ラブ調査
9	二ツ製奥谷	1969 〃 (1号黨)	31	＊ (ワクダニ)	戸津1号黨
10	＊ カセイデ		32	＊ (シヨウガダニ)	〃
	三浦台縁辺域				
11	箱宮(ドウガヤチ)	1969 大聖寺高校郷土研究部調査 (1・5号黨)	33	馬場川水系域	
12	矢田野ナゴオヤマ	1986 小松市教委調査	34	上荒屋ジャモンダニ	
13	＊ 向山		35	＊ サンマイダニ	
14	二ツ製ガマダニ		36	馬場ニカヤマ	
15	＊ 東山		37	上荒屋(ホウジョウウヤマ)	1986 小松市教委調査(3号黨) 瓦陶事業黨(1号黨)
16	＊ ワキガマ		38	＊ ハカンタニ	
17	＊ 横川		39	湯ノ上ユノカミダニ	
18	＊ サンマイダニヤマ		40	西荒屋カマダニ	
19	＊ トウダヤマ			上荒屋	
20	＊ マルヤマ				
21	＊ トノサマイケ				
22	＊ 豆岡山	1981 小松市教委調査(1号黨)			

注) 黨跡群名については、小松丘陵黨跡群分希調査報告Ⅰ(石川考古学研究会誌第31号 小松高等学校地歴部・近岡 強 1988)での単位支群によるグループに基づき、現在までに発掘調査等が実施されたものについては既知の名称を用い、加えて前述の分布調査報告Ⅰでの単位支群名をカッコ内にカタカナで表記した。その他のものについては、カタカナの単位支群名を地名の後に付して黨跡群名とした。

第2章 調査に至る経緯と調査概要

第1節 調査に至る経緯

ニツ梨横川1号竊跡の調査は、団体営ニツ梨土地改良事業（圃場整備）施工に伴う緊急発掘調査によるものである。

昭和61年1月に市農林水産課（当時）より、昭和61年度から総面積約51haに及ぶニツ梨地区の土地改良事業を実施するため、当該地における埋蔵文化財の取り扱いについて協議があった。市教育委員会は、かかる土地に埋蔵文化財が存在する可能性が高いため（一部周知の遺跡となっている）、試掘調査によってその確認調査を行う必要がある旨を回答し、その時期について協議を行った。

試掘調査は、工事計画に合わせて昭和61～63年度に行った。

また、この工事計画とは別に、小松市教育委員会で国庫補助を受けて、南加賀古竊跡群の詳細分布調査の実施を計画し、昭和61年度はその内のニツ梨古竊跡群を対称とした。この詳細分布調査は、ニツ梨町から那谷町へ抜ける主谷通称大谷及び奥谷地区を行い、奥谷地区で灰層が田面で検出された。この工事に係る分布調査及び詳細分布調査でニツ梨地区で新たに確認された遺跡は、この奥谷地区のみであり、この遺跡をニツ梨横川古竊跡（1号竊跡）とした。

昭和63年、この奥谷地区の工事を昭和64年度（当時）以降に実施するため、この竊跡の発掘調査の依頼が市農務課よりあった。当初、この部分を削平する計画であったが、盛土等工法変更で保存できないかの協議を行ったが、狭少な谷の中の土の移動であり、また、この田面付近がやや高く削平する以外にないので変更はできず、発掘調査を行うこととなった。



第2図 調査地位置図（S = 1 / 5000）

第2節 調査概要

調査は、昭和63年10月15日より開始した。まず、詳細分布調査で灰層が確認された田面と隣（北）の田面に、両者間の畔を基準に2m×2mのグリッドを設定し、掘下げを開始した。

調査は、耕土下の遺物包含層・灰層の厚みやその範囲、また遺構の存在有無の確認を主眼に行った。

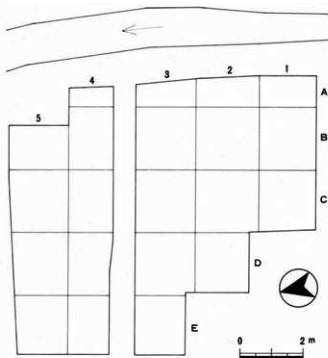
その結果、灰層の厚み及び拡がりは確認できたが、その他の遺構は検出されなかった。20cm～30cmの耕作土の下に一部灰褐色粘質土が見られるところもあるが、大部分は淡黒灰色粘質土となり、この層の下に灰層が存在していた。

以前の耕地整理で相当深く削平された部分が認められ、灰層まで影響が及んでいた。

調査は、灰層の他は遺構が認められなかったので、灰層の断面図及び範囲図作成を行って、10月26日に終了した。



調査風景



第3図 グリッド配置図 (S=1/120)

第3章 遺 構

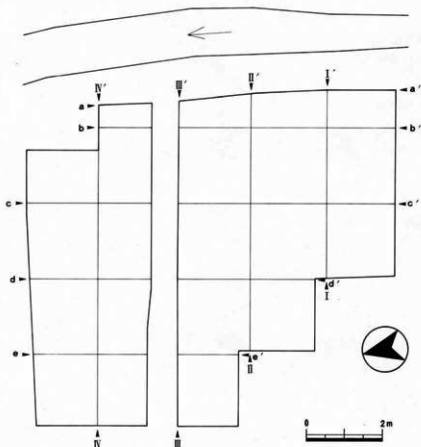
検出された遺構としては前述のように須恵器窯跡の灰原の一部であった。

灰層は、最も用水寄りの部分（aライン）で浅く、田面下約40cmで検出され、西に向かうに従って深くなり、消失するE-5区部分では70cmである。つまり、当時は東側の丘陵斜面の延長でなだらかに下っていたと考えられた。灰層の最も厚い部分は35cmであった。

前述のように以前の耕地整理で影響を受けた部分も認められた。特に、A-4区からB-4・5区にかけては一部灰層が認められなかった。

灰層が検出された範囲は、用水との境の畔より西へ7.2m、幅（南北）5.6mであった。

出土遺物は、全て須恵器でこの灰層より主に出土し、その上の淡黒灰色土からも若干出土して

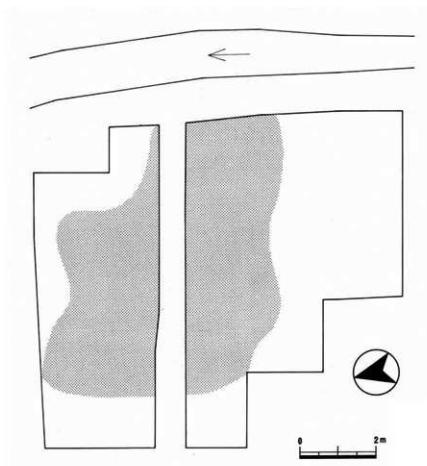


第4図 土層セクション配置図 (S=1/100)

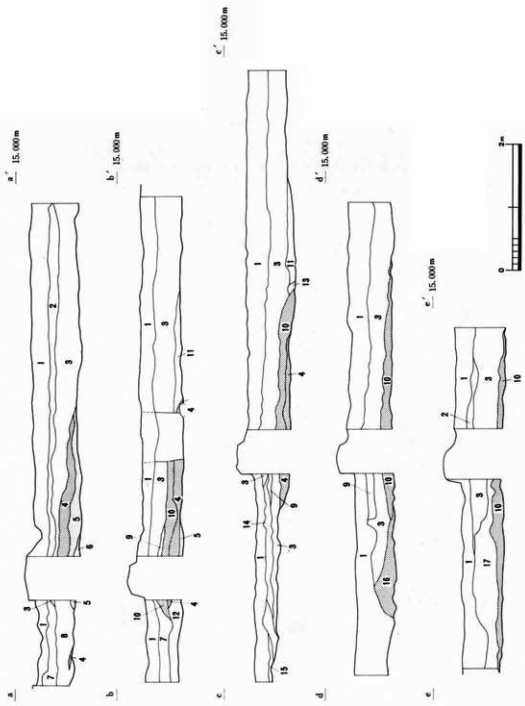
いる。この淡黒灰色土は、開田や耕地整理などにより人為的な場合のほか、この土が堆積していく過程で、斜面に存在する窯体あるいは灰原の遺物が流れこんだものと考えている。

また、灰層及びその上の淡黒灰色土より須恵器に混在して鉾津が検出されたが、遺構は確認できなかった。用水の斜面側断面に土器を含んだ灰層の北側に土器を含まない黒色灰層が認められることより、これが製鉄跡の灰層と考えられる。須恵器窯跡と製鉄跡の遺構は丘陵斜面に存在するものと考えられる。なお、須恵器窯跡の数はその灰層がほぼ単一層であることにより、1基であると思われる。

なお、この灰層の下には褐色の腐植土が認められ、腐植途中の木や木根が多く混じっていて、これは、灰原形成以前のものと考えられた。

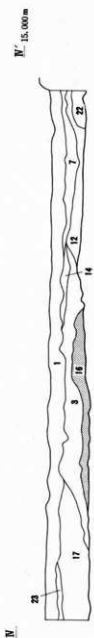
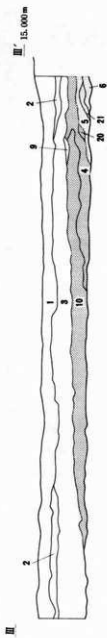
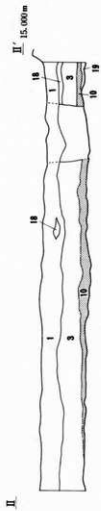
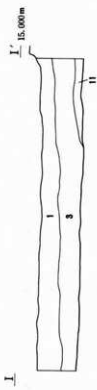


第5図 灰層範囲図 (S=1/100)



第6図 土層セクション図 (S=1/60)

- 耕作土
- 第1層 灰褐色粘質土
 - 第2層 淡褐色粘質土
 - 第3層 淡褐色粘質土
 - 第4層 淡褐色粘質土
 - 第5層 淡褐色粘質土
 - 第6層 淡褐色粘質土
 - 第7層 淡褐色粘質土
 - 第8層 淡褐色粘質土
 - 第9層 淡褐色粘質土
 - 第10層 淡褐色粘質土
 - 第11層 淡褐色粘質土
 - 第12層 淡褐色粘質土
 - 第13層 淡褐色粘質土
 - 第14層 淡褐色粘質土
 - 第15層 淡褐色粘質土
 - 第16層 淡褐色粘質土
 - 第17層 淡褐色粘質土
 - 第18層 淡褐色粘質土
 - 第19層 淡褐色粘質土
 - 第20層 淡褐色粘質土
 - 第21層 淡褐色粘質土
 - 第22層 淡褐色粘質土
 - 第23層 淡褐色粘質土
- 土器・やや含
 - 土器含
 - 土器・焼土・やや含
 - 焼土含
- 焼土・炭多く含
- 土器・磁滓・炭・やや含
 - 土器・焼土・炭・やや含
- やや粘質
 - 焼土・やや含



第7図 土層セクション図 (S=1/60)

第4章 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、総て二ツ梨横川1号窯跡の灰原から出土した須恵器で、殆どが、1号窯跡で生産された製品であると思われる。出土量はパンケースで36ケース、破片数で7,329点を数える。器種は、蓋環（坏蓋と有台环のセット）、無台环、無台皿、有台皿、高环等の供膳器、すり鉢、盤等の調理器、鍋、長甕、小甕等の煮沸器、短頸壺、小壺、双耳瓶、長頸瓶、横瓶、甕等の貯蔵器で構成されており、出土量のわりには器種が豊富である。また、特殊な器種として須恵器製の甕形土器が出土しており、注目される。

第1節 器種の構成比率

器種構成は、破片数計測法と口縁部計測法（宇野1988）を使用してその比率を出してみた。各器種ごとの破片数は供膳器5,299点、調理器43点、煮沸器532点、貯蔵器1,455点で、供膳器が72%と過半数を占める。口縁部計測法でも供膳器が圧倒的に多く、91%を占め、次いで貯蔵器の5%、煮沸器の3%、調理器の1%と続く。

供膳器の内容については、坏蓋が648点（12%）、有台环が537点（10%）、無台环が2,141点（40%）、無台皿が1,502点（29%）、有台皿が422点（8%）、高环が49点（1%）の破片数を数え、口縁部計測法では、坏蓋29%、有台环13%、無台环25%、無台皿21%、有台皿10%、高环2%の比率が得られる。坏蓋と有台环は蓋环の1器種であるから量の多い坏蓋を重視して考えれば、蓋环と無台环がそれぞれ3割程度で、坏類としては全体の6割以上を占める。皿類は無台皿25%、有台皿10%で3.5割と比較的多く、供膳器の中の1つの器種として定着したものと考えられる。高环の比率は少なく、2%を占める程度である。

調理器は全体の1%しか占めない器種で、すり鉢85%（破片数37点）、盤15%（破片数6点）で構成される。

煮沸器は破片数で7%、口縁部計測法で3%を占めるもので、鍋、長甕、小甕で構成されている。破片数の比率では鍋が122点、長甕が389点、小甕が21点で長甕が圧倒的に多いのに対し、口縁部計測法では鍋45%、長甕53%とほぼ半々の比率をもつ。小甕の比率は少なく、2%を占める程度である。

貯蔵器は甕の胴部破片が多いため、破片数では全体の2割程度を占めるが、口縁部計測法では5%と少ない。貯蔵器の中での比率は、破片数で短頸壺8点、小壺10点、双耳瓶19点、長頸瓶54点、横瓶61点、甕1,303点、口縁部計測法で短頸壺13%、双耳瓶4%、長頸瓶11%、横瓶3%、甕69%であり、甕の構成比率が7～9割と高い。壺・瓶類では少々のバラツキはあるものの、ほぼ同率で構成されている。

第2節 各器種の検討

(1) 蓋環 (第8~10図、写真図版2・3)

杯蓋・杯身のどちらも口径からⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の3つに分けられる。

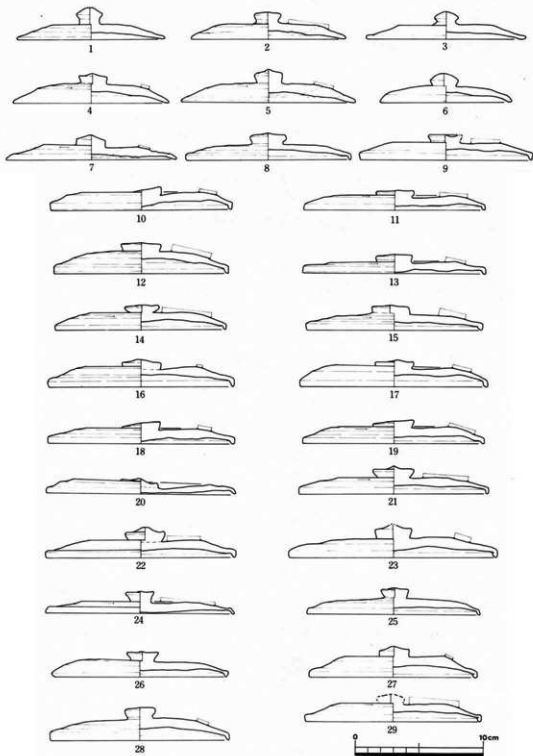
杯蓋Ⅰ類 (33~38) 口径17~19cmを測るもので、いずれも宝珠形の鈕が付く。口縁端部は折り返して作っているが、薄手でしっかりと折り返しているもの(33・37)と断面が逆三角形状になっているもの(34~36・38)とが存在する。また、天井部は総て回転ヘラ削りが施されており、偏平な器形と山笠状に開く器形とがある。

杯蓋Ⅱ類 (8~32) 口径13~15cmを測るもので、偏平な器形のもの(1類)が主体をなす。偏平な器形のもの、鈕の形態から偏平鈕をもつa類(8~19)、偏平ではあるが、宝珠形のb類(20~23)、宝珠鈕に近いが、鈕の上面が平坦でボタン状をなすc類(24~30)とに分けられる。口縁部の形態は薄手でしっかりと折り返すものと折り返しが微弱になったり厚手になったりするものがあり、Ⅱ₁a類には前者の口縁部形態が多く、Ⅱ₁b類やⅡ₁c類には後者の口縁部形態が多いようである。また、僅かであるが、天井部の器肉が厚く丸味をもつ器形のもの(2類)も存在する。この器形のもの(31・32)は大半が鈕c類の付くもので、口縁部の形態が基部を段状に押さえ込んで屈曲させ、端部を折り返しており、特徴的である。調整はいずれも天井部に回転ヘラ削りを施すもので、後にナデで仕上げるものもある。

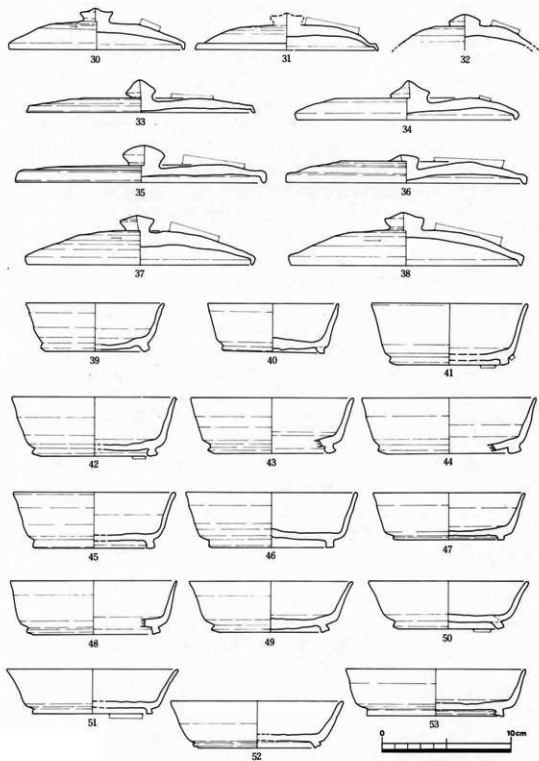
杯蓋Ⅲ類 (1~7) 口縁端部に折り返しをもたないもので、口径10~14cmを測る。天井部は回転ヘラ削りを施し、平担部をもつ。鈕の形態は宝珠形のもの(1・3・5・6)とc類としたボタン状のもの(2・4・7)がある。Ⅲ類蓋は口縁端部に折り返しをもたないものを基本とするが、僅かに端部で内傾するもの(6・7)もある。

有台杯Ⅰ類 (54~57) 口径16~18cmを測るもので、杯蓋Ⅰ類とセットをなすものである。器形は底部からややなだらかに屈曲して真つぐ立ち上がる体部へ移行するもので、径高指数40前後を測る身の深いⅠ₁類(54~56)と径高指数34程度のやや身の浅いⅠ₂類(57)とがある。底部は回転ヘラ削りを施した後にナデ調整するものが一般的で、体部と底部の境付近にハの字状に踏ん張った短い高台を貼付する。また、体部には1~2条の沈線を施すものもみられる。

有台杯Ⅱ類 (41~53) 口径12~14cmを測るもので、杯蓋Ⅱ類とセットをなすものである。身の深さにより径高指数40前後のⅡ₁類(41)と径高指数30~36程度のⅡ₂類(42~50)と径高指数26前後のⅡ₃類(51~53)に分化できるが、Ⅱ₁類とⅡ₂類は極めて少なく、Ⅱ₃類が主体となる。器形は底部と体部の境が明瞭となるものは少なく、丸味をもって立ち上がるものが多い。体部は外傾度70~75で真つぐ立ち上がるもの(39~48・53)と外傾度60前後にやや開くもの(49~52)があるが、前者が主体的である。底部は回転ヘラ削りのみられるものも存在するが、丁寧なナデ調整で仕上げているものが大半で、回転ヘラ切り後か回転ヘラ削り後かは不明である。高台はハの字状に踏ん張る形態のものを体部と底部の境よりやや内側に貼付するものが多い。



第8図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/3)
 (実測図に記した「→」や「□」はそれぞれへら削りの方向とその範囲を示す)



第9図 二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/3)

有台環Ⅲ類 (39・40) 口径10~11cmを測るもので、環蓋Ⅲ類とセットをなすものである。器形は径高指数35前後のやや深身のもので、体部と底部の境付近にハの字状に踏ん張る高台を貼付している。底部の調整は回転ヘラ切り後ナデを施す。

以上のⅠ・Ⅱ・Ⅲ類の蓋環の構成内容は、環蓋と環身でそれぞれ比率を出すとⅠ類が33%と17%、Ⅱ類が62%と78%、Ⅲ類が5%の結果を得ることができる。Ⅰ類の構成比率が2割以上と1つの器種として定着してきた様相がみられるが、主要な器種は全体の7割程度を占めるⅡ類であり、Ⅲ類にいたってはあくまでも従的な器種として存在する程度である。

(2) 無台環 (第10・11図、写真図版3)

口径12~14.5cmを測るもので、12~13.5cmに集中する傾向がみられる。この口径は有台環Ⅱ類に対応するもので、この中で口径による分化は認められない。しかし、身の深さによって径高指数27前後(1類)と23前後(2類)に分けることができる。

1類は体部の立ち上がり方で、比較的明瞭に立ち上がるa類(58~73)と内湾して不明瞭に立ち上がるb類(81~83)とに分けられる。1a類は厚手の底部からやや外傾して直線的に立ち上がるものが一般的で、底部が薄手のもの(70・71・73)は少ない。1b類はやや厚手の底部から丸味をもって立ち上がりそのまま外傾するもの(82・83)とやや薄手の底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反するもの(81)が存在する。調整技法は回転ヘラ切り後にナデ調整を施したものが一般的で、1点のみ83で体部下位に回転ヘラ削り調整がみられる。

2類も1類同様a類(74~80)とb類(84・85)に分けられる。2a類・2b類ともに1類と同様の器形・調整がみられる。

以上の無台環は、a類が主体的で、b類は1割にも満たない比率である。また、a類では1類の比率が高く、2類と7:3程度の割合で構成される。

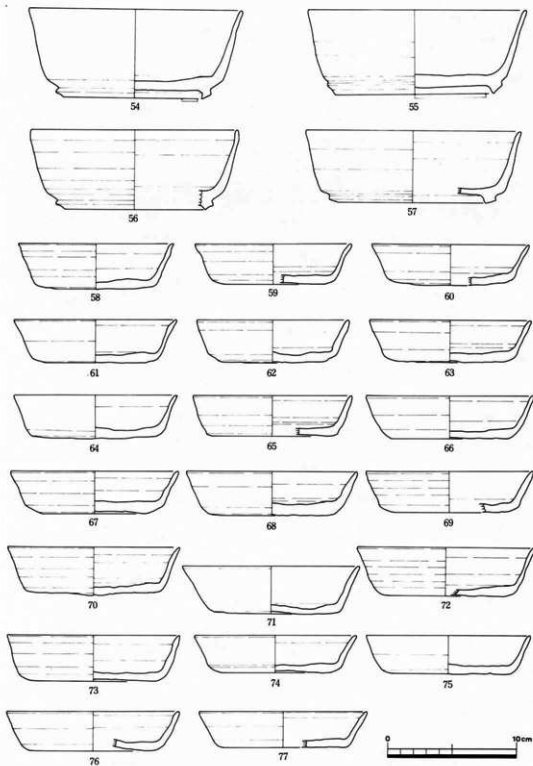
(3) 無台皿 (第11・12図、写真図版3・4)

器形により体部が薄手で短くやや直立気味の1類、体部が厚手で短く立ち上がる2類、体部が薄手で長く外傾する3類に分けることができる。

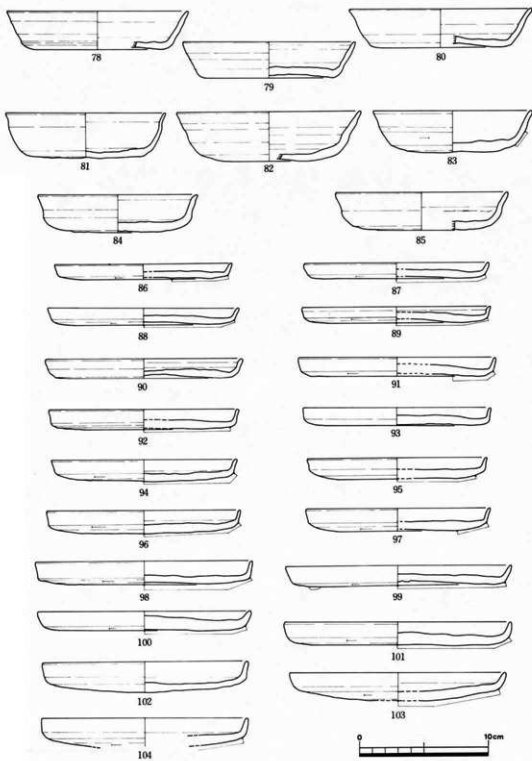
1類は底部が平底で径高指数9~10の極めて偏平なa類(86~93)と底部がやや丸味をもち径高指数12程度のやや器高をもつb類(94~99)に細分できる。1a類は器高が1.6cm以下で口径が14~15.6cmにまとまる小型のもので、底部には回転ヘラ削りを伴うものが多い。1b類は器高が1.6~2cmで口径が14~15cmの小型品(94~97)と17~18cmの大型品(98・99)があり、1a類と同様底部には回転ヘラ削りを伴うものが多くみられる。

2類は16.5~18cmの口径を測るもので、底部が丸味をもちやや器高のあるもの(102~104)と平底でやや偏平なもの(100・101)がある。

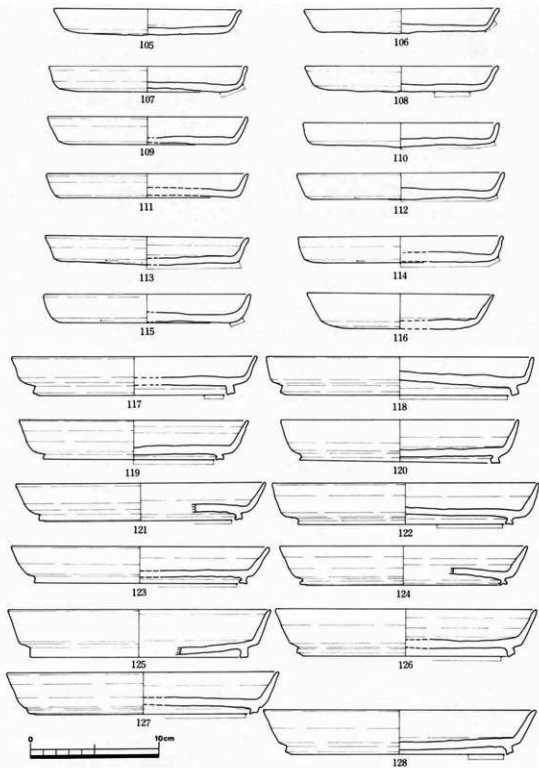
3類は径高指数12~14のa類(105~115)と径高指数19程度のb類(116)に分けられる。3a類は器高が2~2.5cm、口径が15~16.5cmを測り、中型の法量を示す。底部の調整は回転ヘラ切り後ナデ調整するものと回転ヘラ削り調整をするものがあり、1類よりもナデ調整が目立つ。



第10図 二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/3)



第11図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/3)



第12図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/3)

3 b類は器高2.7cm、口径14.7cmを測る身の深いもので、無台環に近い形態をもつ。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施している。

以上の無台皿は1類と3類が主体となる形態で、2類は1つの形態として定着するものではない。1類と3類との量比は1類が約5割に対し、3類が4割程度を占める。口径は15.5～16.5cmに集中する傾向があり、その前後で漸移的に減少する。

(4) 有台皿 (第12・13図、写真図版4)

径高指数17前後に体部が短く立ち上がる1類と径高指数21前後に体部が長く外傾する2類に分けられる。底部の調整はナデ調整で仕上げているものもあるが、回転ヘラ削り後である場合が多く、基本的には回転ヘラ削り調整を施すものである。

1類は体部が直立するa類と外傾するb類がある。1 a類(117・118)は口径19～21cmのやや小型の部類にはいるもので、ハの字に踏ん張るしっかりとした高台が付く。1 b類は口径が18～21cm程度のやや小型のもの(119～126)と口径が21～23.5cm程度の大型で比較的体が深目のもの(127～132)とがある。前者の器形は体部と底部の境が丸く不明瞭で、ひしやげた高台が付くものも多く、後者の器形は体部と底部の境が明瞭に角張り、ハの字に踏ん張るしっかりとした高台が付くものが多い。

2類(113～139)は口径が21～23cmを測るものも多く、大型の法量の形態である。器形はやや厚手の底部から屈曲後真つぐ外傾する体部をもつが、屈曲部分が明瞭に角張るもの(137)は少なく、やや丸味をもつものが多い。高台は断面方形でハの字に踏ん張るものとややひしやげた形のものがある。

以上の有台皿は2類の深身のものが2割程度と少なく、主体は1類特に1 b類で7割以上を占める。口径は18～24cmに分布するが、20～22cmに集中しており、その前後で漸移的に減少する。

(5) 高環 (第14図140～142、写真図版4)

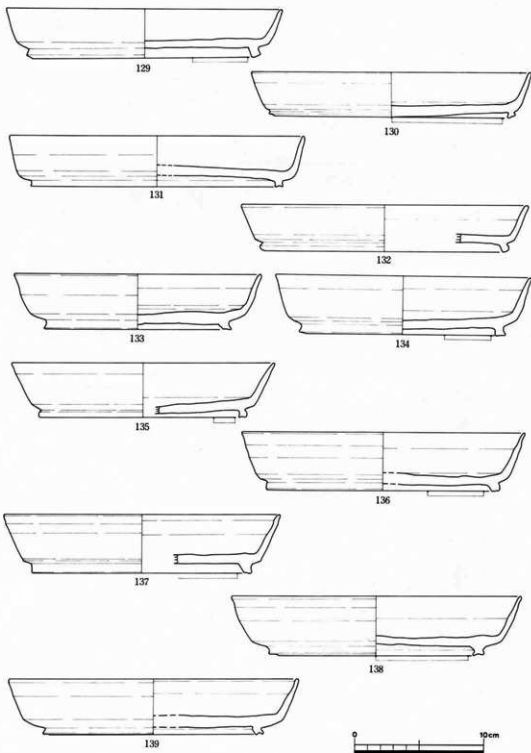
総て蓋を逆転させたような偏平な坏部をもつ高環である。口径21～22cm、器高9～10cm、脚径11～12cmを測るもので、坏部の底を回転ヘラ削り調整してある。

(6) 盤 (第14図143、写真図版5)

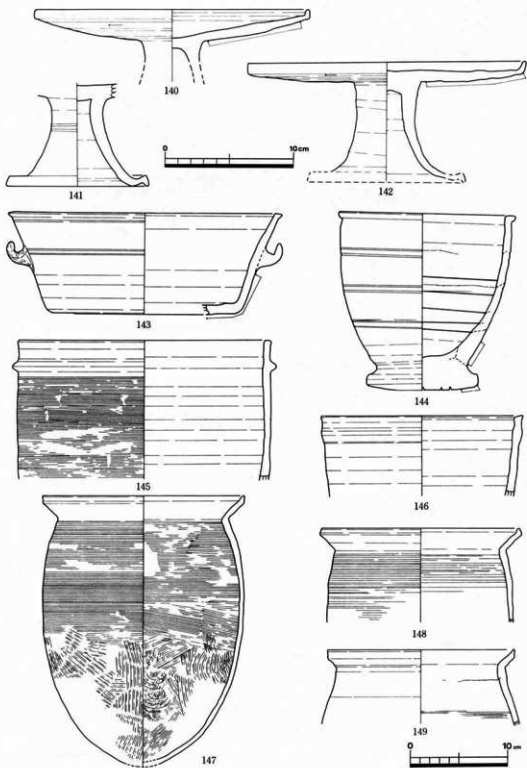
平底の底部を呈し、体部の中頃に左右2個の把手を付すものである。調整は体部下半と底部に回転ヘラ削り、底部内面に同心円文叩きが施され、それ以外はナデ調整である。

(7) すり鉢 (第14図144～146、写真図版5)

口縁部の形態により、口縁端部に幅狭の突帯が巡る1類と口縁部の若干下に突帯が巡る2類に分けることができる。1類(144)は内外面に2本の沈線を3段に施すもので、小型の製品が多いようである。2類(145)は沈線を施すものが少なく、カキ目調整(145)を主体的に用いるようで、大型の製品が多い。146は2類に属するものである可能性強いが、胎土に混和材が入っており、煮沸器のものと共通している。口径が小さいことを除けば、甗と器形的にも近似したものであり、その可能性もある。



第13図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/3)



第14図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (140~141はS=1/3、それ以外はS=1/4)

(8) 長甕 (第14図147~149、写真図版5)

口径は19~21cm程度。器形は丸底の底部から砲弾形に立ち上がり、頸部で「く」の字に屈曲して口縁上端部を積み上げるもので、口縁部をナデ、胴部上半をカキ目、胴部下半を叩き調整する。叩き目文は外面で平行線文、内面で同心円文(D a類とD c類が存在するが、D c類が主体的)で、内面の同心円文叩きの後に刷毛目調整を施すものもある。胎土はいずれも混和材を含む。

(9) 小甕 (第15図152・153、写真図版5)

口径が11~14cm程度と小さいことや平底を呈すること、口径よりも器高が小さいことなど甕として扱えないかもしれないが、口縁部が「く」の字に屈曲し、その上端部を積み上げる器形や胎土は長甕に共通するため、小甕として扱った。調整はナデ調整で、152は回転ヘラ切り痕をもつ。

(10) 鍋 (第15図150・151、写真図版5)

口径は25~30cmを測るもので、丸底の底部から開いて立ち上がり、口縁部で「く」の字に屈曲して上端を積み上げる器形を呈する。調整は口縁部をナデ、胴部上半をカキ目、胴部下半外面を不整方向のヘラ削り、内面を不整方向の刷毛目が施されている。胎土は混和材を含む。

(11) 短頸壺 (第15図154~157、写真図版5)

口縁部が短く立ち上がる器形のものを一括して短頸壺として扱った。胴部の器形からやや直線的な1類(155・156)と丸味を帯びる2類(157)とに分かれ、1類の口縁端部が若干平坦であるのに対し、2類は丸く仕上げる特徴をもつ。また、短頸壺の蓋と思われる154も存在する。

(12) 小壺 (第15図158・159)

底部付近の破片のため、器種の断定はできないが、底部に回転糸切り痕をもち(ヘラ削りは伴わない)、厚手の底部からやや立ち気味に立ち上がる器形から考えてここでは小壺として扱った。

(13) 長頸瓶 (第15図160~162、写真図版6)

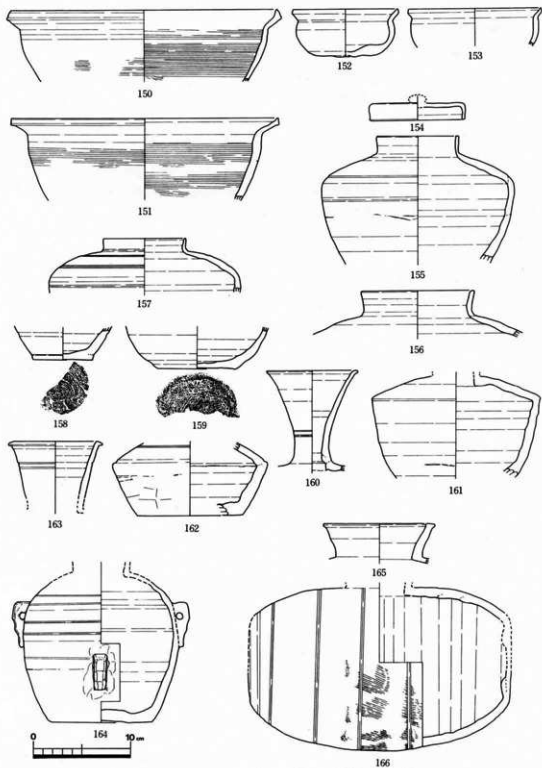
口頸部の器形はやや頸部が短く、基部付近から緩やかに外反してゆき、口縁端部で外屈して丸くおさめる。胴部は上位に屈曲部をもち、屈曲部以下がややずん胴になる。底部は高台を付すものかそうでないものがあり、概して前者が一般的と思われる。口頸部長と胴部長の比率はほぼ1対1か胴部が若干長くなる。

(14) 双耳瓶 (第15図163・164、写真図版6)

口頸部は頸基部から外傾して直線的に立ち上がり、口縁端部外面を突出させる器形を呈する。概して長頸瓶よりも頸部が太くて短い。胴部は上位に最大径をもち、全体的に丸味を帯びた器形で、平底を呈す。把手は肩部に対照的に2つとその2つの中央、胴下部に1つの計3つが付されている。形態は断面平板状、平面台形状で端部を面取りしてある。穿孔は上方に1カ所穿たれる。

(15) 横瓶 (第15図165・166、写真図版6)

口頸部は頸部屈曲後外傾して短く立ち上がり、口縁端部で内外面に突出する器形を呈す。胴部は楕円形の両端を平らにした器形を呈し、叩き調整(外面平行線文、内面同心円文)後ナデ調整を施す。特に、内面のナデ調整は入念で、叩き目を消去している。

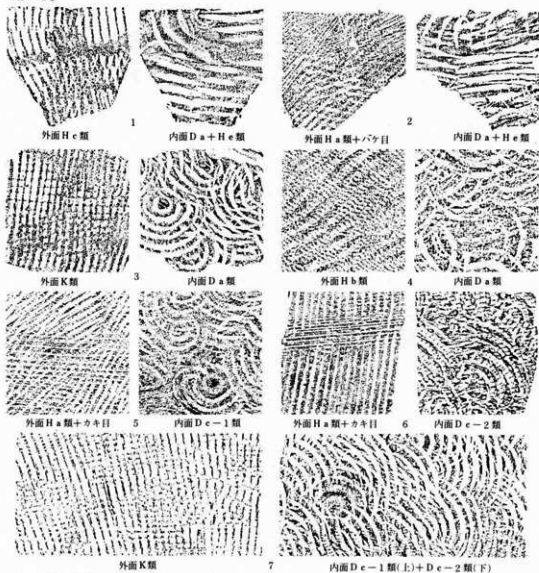


第15図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S=1/4)

(16) 甕 (第16図、第17・18図167~175、写真図版6)

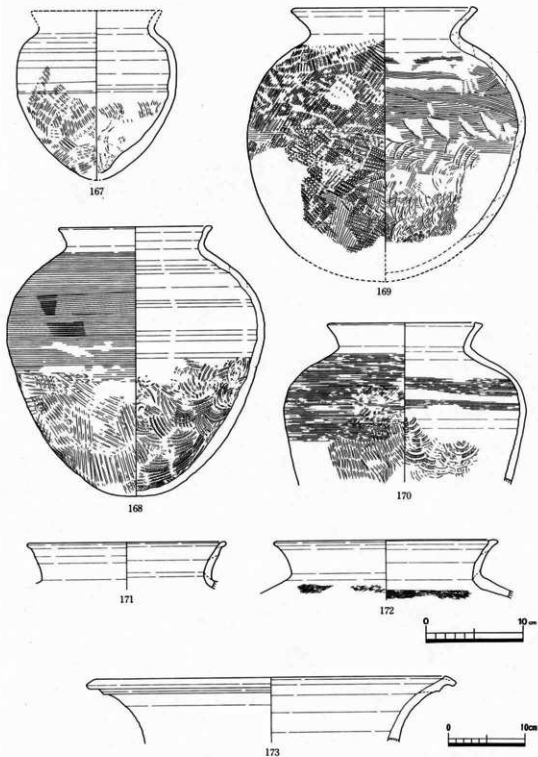
口径の大きさにより、大甕、中甕、小甕の3器種に分けられる。

大甕(173~175)は口径50~60cmを中心とするもので、口縁部が長く外反する器形を呈す。そして、口縁端部が内外面に突出し、口縁端部直下には弱い突帯が巡る。胴部は上位に最大径をもち、球卵状を呈する。調整は外面で平行線文叩きとカキ目調整を併用し、内面で同心円文叩きを用いる。



Ha類—平行線文で木目が彫り込みに対し直行するもの
 Hb類—平行線文で木目が右上がりに斜行するもの
 Hc類—平行線文で木目が左上がりに斜行するもの
 He類—平行線文で木目が見られないもの
 Da類—同心円文で木目の見られないもの
 Dc類—同心円文で柁目状の木目が見られるもの
 K類—格子文のもの

第16図 須恵器甕胴部叩き目文分類図 (S=1/2)



第17図 ニッ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (173のみS=1/5, それ以外はS=1/4)

中甕(168~172)は口径20cm前後を中心とするもので、口縁部がやや短めに外傾する。口縁端部は内外面が突出するもの(172)、内面のみ突出するもの(169・170)、外面のみ突出するもの(171)が存在し、その形態は一様でない。胴部の器形は、上位に最大径をもち球卵状を呈する1類(168・170)と中位に最大径をもち球形を呈する2類(169)とに分けられ、1類が一般的である。1類の調整は外面平行線文叩きと内面同心円文叩きを基本とするものの、胴部上半をカキ目またはナデによって叩き目を消去しているもの(168・170)と叩き目を消去していないもの(172)とが存在し、前者はやや小型のもの、後者はやや大型のものに多く用いられるようである。2類の調整は外面平行線文叩き、内面同心円文叩きを用いることは1類と共通するが、内面にカキ目を多用することや底部付近を内外面とも縦方向の刷毛目調整を施す点は他と異なり、異質の技法の感がある。

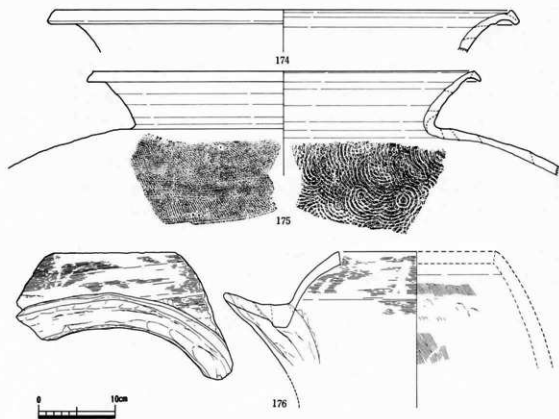
小甕(167)は口径13cm程度のもので、口縁部が短く外傾する形態のものと思われる。胴部は中甕1類と同様、上位に最大径をもつ器形で、中甕1類のやや小型のものと同通した調整方法を示す。

また、甕の胴部叩き目文については、内堀信雄氏の分類(内堀1988)に基づいて第16図のように分類してみた。外面では平行線文と格子文があり、平行線文が主体をなす。平行線文はa~c類が存在し、その中でa類が多く目立つようである。格子文は正格子文のもので、数量は少ない。また、外面の叩き後には刷毛目やカキ目調整が施されることが多く、胴部上半部の叩き目をカキ目調整によって消去するものもある。内面では同心円文が施される。同心円文はa類とc類が存在し、c類が9割、a類が1割程度で構成されている。c類の柃目には本目の細かいもの(1類)と粗いもの(2類)とが存在しており、1つの甕に両方用いられているもの(2類は主に底部付近に用いられた)もみられる。また、a類の同心円文叩きと組み合わせる形で平行線文を施すもの(1・2)も少量みられる。

以上、大・中・小の甕の中では中甕が一番多く、全体の80%をも占める主要器種である。次いで、大甕の15%、小甕の5%と続くわけだが、中甕に比べてその量は少ない。甕の法量と叩き目文の関係については、どの法量のものにも内面に同心円文c類がみられ、法量による偏りは認められない。

(17) 甕形土器(第17図176、写真図版6)

口縁部から体部上位までの破片であるため、断定はできないが、庇状の突帯が付される形態から甕形土器を想定したい。この器種は土師質のものが一般的であるが、当窯跡のものは須恵質で焼かれている。当窯跡で生産されたものと考えて良いだろう。しかし、胎土は煮沸器のものと同様、多量の混和材を含むもので、土師器に近似している。体部の器形は上半が内湾してすばまり、ヘラ削りで垂直に面取りした口縁部に至る。調整は外面を横方向の刷毛目調整、内面を縦方向の刷毛目調整(一部指頭圧痕)で仕上げている。庇は上部が緩く円弧を描くような形態で整形時の指頭圧痕を残す。器肉は全体的に厚く、成型時の粘土継接痕が目立つ。



第18図 ニツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器 (S = 1 / 5)

第3節 窯詰め方法の検討

個々の出土須恵器から窯詰め方法を考えてみたいと思う。

供膳器では蓋環を除く器種において、口縁部外面にリング状に降灰する状況がみられ、同器種のものそのまま柱状に積み重ねて焼く方法が採られていたと考えられる。しかし、蓋環では環蓋の降灰状況から外面全体のみまたは外面全体と内面口縁部に降灰したもの（1類）、外面の体部下方以下のみ以降灰したもの（2類）、外面体部下方以下と内面全体以降灰したもの（3類）、外面体部下方以下と内面体部以下以降灰したもの（4類）とに分けられる。これをもとに重ね焼き方法を推察してみれば、1類は蓋と身を使用状態で重ねたものを1単位として各個体間に積み上げる方法、2類は蓋を逆さにして身と組み合わせたものを1単位として正位のものと同位のもの⁽¹⁾を交互に積み上げる方法、4類は2類のものと同じ単位⁽¹⁾のものを正位のまま積み上げる方法、3類は2類と4類のどちらかの方法が採られていたと考えられる。これらの量比は1類が全体の90%を占める主体的方法で、2類が5%、3類が3%、4類が2%と柱状に積み重ねる方法は極めて少ない。法量別ではⅠ類とⅡ類では上記とほぼ同量の数値が求められるものの、Ⅲ類では1類の方法だけが使われている。この重ね焼きの方法は1類が古墳時代から続く伝統的な方法であ

るのに対し、2～4類のものは新しく導入される方法であり、当窯跡の段階がその転換期に当たると考えられる。⁽²⁾

煮沸器のように底部の丸いものについては伏せて焼く可能性もあるが、内面に灰や釉の被ったものが多く、底部にスサ状の粘土が溶着したものもあることから、底部をスサ入り粘土で固定して焼いたものと考えられる。また、貯蔵器の甕も前者と同様の方法を探ったと考えられ、他の壺瓶類についてはそのまま正位におかれたと考えられる。

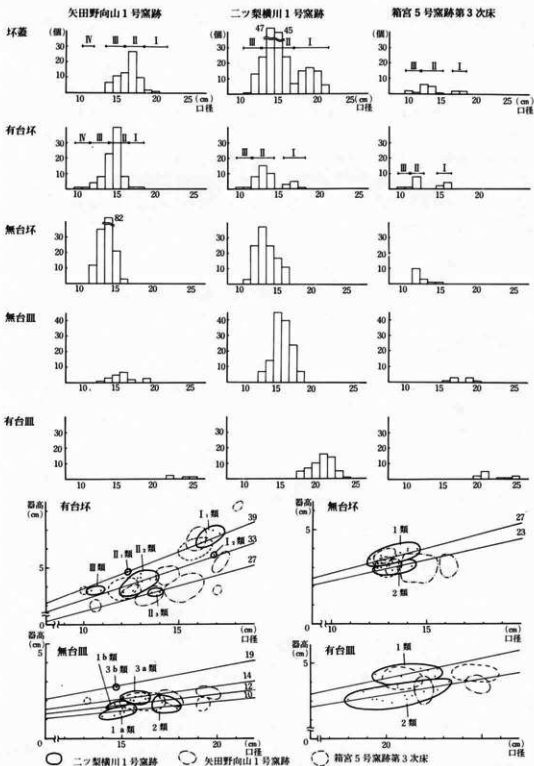
焼台等の窯道具は当窯跡では確認できなかった。焼台の普及は戸津5号窯跡段階では確実と考えられるが、その前段階では不明な点が多い。その出現は矢田野向山1号窯跡や流団No.16号遺跡1・2号窯跡で出土があるため、この段階に求めることが可能であるが、以後の窯跡資料に一般的に認められるものではなく、かなり特殊なものとして使用されたように考える。

第4節 編年の検討

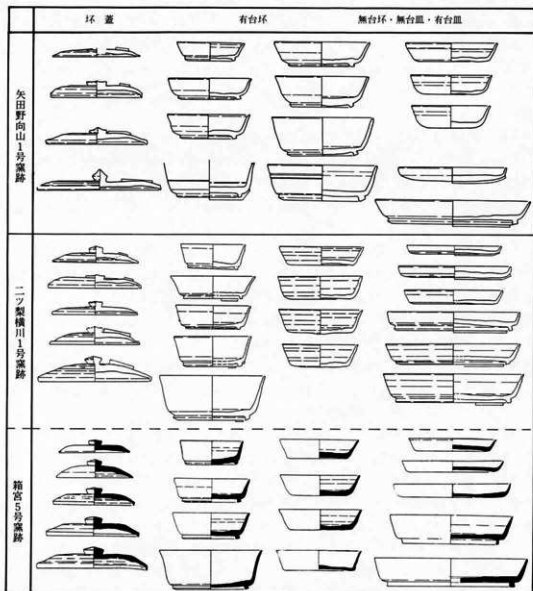
今回の調査で得られた資料は、第3章でも述べたとおり、1基の窯跡の灰原資料であり、数回操作が行われていたとしても、時間的にはまとまりをもつものと考えられる。この前提に立ち、南加賀古窯跡群の窯跡資料と対比しながら、本窯跡の土器様相と編年の位置付けを試みてみたい。

供膳器についてみると、まず蓋環が3つに法量分化し、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類の割合が25%、70%、5%と法量分化が定着していることが挙げられる。このような法量分化は平城Ⅱ期（矢田野向山1号窯跡段階）に導入された宮都的な器種組成が定着し、在地化されたものとして評価できるもので、矢田野向山1号窯跡でみられた多様な法量分化（4類に分化し、さらに器高によって1～3種に分化）から器種淘汰され、定型化したものとする。また、口径の分布でも縮小化がみられ、矢田野向山1号窯跡から箱宮5号窯跡まで漸移的な流れが看取できる。しかし、奈良時代前半からの系譜を引くと思われる偏平鈕を付す環蓋Ⅱ、a類や器高の低い有台環Ⅱ、類が未だ一定量（環蓋Ⅱ、a類は4割弱、有台環Ⅱ、類は1割程度）存在している。また、有台環Ⅰ類の高台は体部立ち上がり部分にハの字に貼付され、底部にはヘラ削りが施されるもので、矢田野向山1号窯跡のものによく似た様相をもち、奈良時代前半の様相を色濃く残している。しかし、これとは逆に環蓋の鈕では定型化された宝珠鈕は少なく、ボタン状に形態化したものが多く、また、二ツ梨10-B号窯跡段階（望月・福島1988）で一般化されるとと思われる環蓋Ⅱ、類のような新しい様相のものも少量ではあるが存在する。

次に、無台皿や有台皿の皿類が4割近くを占め、主要器種として定着していることである。矢田野向山1号窯跡段階で出現したこの器種は、出現当初1割に満たなかったもので、蓋環と同様宮都的な器種組成として導入されたものが、当窯跡の時期に主要器種として定着したのと考えられる。また、形態についても矢田野向山1号窯跡では底部が厚く体部の短く直立する無台皿1種であったものが、当窯跡ではその発展形態と思われる1類に加え、新しい様相として体部が長く



第19図 供膳器口径変遷図(上)及び法量分布図(下)



第20図 奈良時代中頃の須恵器窯跡編年図 (S=1/6)

「箱宮5号窯跡の資料は(大聖寺高校1971)より転載」

外傾する3類やその中間的2類が出現し、口径も矢田野向山1号窯跡より縮小傾向にある。有台皿でも無台皿と同様に形態の多様化と口径の縮小化がみられ、古い様相の体部が短く直立する⁽⁷⁾ a類と新しく出現する体部の立ち上がりが明瞭で外傾する1b(大)類や2類の形態とが混在する。

無台環や高環は矢田野向山1号窯跡及び箱宮5号窯跡と大きな差異は認められないものの、口径は漸移的縮小化の流れが認められ、矢田野向山1号窯跡での無台環法量分化も当窯跡の段階で⁽⁸⁾

は不明瞭となり、奈良時代前半代の扁平な器形（篠原遺跡で坏A a類としたもの）のものがほぼ消滅する。

調理器では矢田野向山1号窯跡段階に出現した盤が把手の妻小化と口径の縮小化という形で変化し、すり鉢が古墳時代から続く1類に加え、大型の2類が出現という形で変化して行っているものの、その変化は微弱なものであり、矢田野向山1号窯跡段階から箱宮5号窯跡段階まで、数量的にも大きな変化はみられない。

煮沸器では矢田野向山1号窯跡段階で出現した土師器器種の長甕、鍋が口縁端部の摘み上げ、胴部器肉の薄手化という形で一層定型化し、数量も若干量増加といった発展的な段階として位置付けられる。これは「北陸型煮沸セット」（田嶋1987）の完成に伴って、須恵器技法と土師器技法の接触の結果、須恵器窯跡でも土師器煮沸器を生産するようになったもので、北陸独特の様相が顕在化したものと言えよう。

貯蔵器では、まず北陸特有の器種である双耳瓶が新たに出現することである。双耳瓶は肩部に2つの把手と胴下部に1つの把手を付し、全体的に丸味を帯びる形態で、まだ、定型化されてはおらず、初源的なものとして位置付けられる⁹⁾。また、この時期に出現するものとしては底部に回転糸切りの小壺が挙げられる。この器種は主体的な器種として発展するものではないが、以後も少量ながら、継続して生産される器種である。そして、あたかもこれら新しい器種の出現に呼応する形で、これまで壺瓶類の主要器種として生産されてきた長頸瓶が減少傾向の道をたどる。また、器形についても奈良時代前半代の定型的形態のものが、当窯跡の段階では口頸部が短くなり、その定型的形態が崩れ始める状況を看取できる¹⁰⁾。

次に甕についてだが、法量上では大甕、中甕、小甕の3種が存在することで奈良時代前半の様相と共通する。しかし、大甕の口縁部に櫛描き波状文や沈線文等の装飾的要素が欠落し、ナデまたはカキ目調整で仕上げるようになる。この装飾的要素の欠落に伴って、7世紀後半から続く内外面に突帯を付す口縁部形態¹¹⁾はこの段階でもみられるが、内面の返り状に付く突帯はみられなくなり、外面にのみ付される。また、中甕には2類のようなやや特殊な器形、調整をもつものがみられ、その系譜が問題視されるわけだが、胴部が球形を呈することや刷毛目調整を多用する特徴は土師器甕に共通点を見出すことができる。しかし、土師器で球形の胴部をもつ小型甕は大きさにおいてかなりの開きがあり、ロクロ土師器が完成されるこの段階で刷毛目調整が土師器的な技法だとするのは時代の流れに逆行するものであることから、一概には土師器との接触の結果生み出されたものとして評価することはできないだろう。今後の課題として残しておきたい。

また、胴部叩き目文については外面平行線文、内面同心円文c類が主流（9割）となっており、矢田野向山1号窯跡段階で導入されると思われるこの文様構成が当窯跡の段階ではかなりの普及をみせている。内面同心円文c類は越前地域に出現し、以後急速に普及した文様であるが、南加賀地方もこの影響下で普及したものと考えられ、越前地域の一般的文様構成である外面格子文、内面同心円文c類のものが少量ながら一定量見られることもこれを補う根拠となろう。

特殊な器種としての甕形土器の評価については、須恵器製である点に問題を含んでいる。そもそも、甕形土器は土師器製のもので、古墳時代後期から西日本を中心として広く分布しており、県内でもこれに対応して少数ではあるが、出土している。おもに、集落遺跡からの出土例なのだが、当窯跡のような須恵器製のもは現在のところ確認されていない。だが、当窯跡のものは胎土が煮沸器と同じ特徴を示していることやその用途から煮沸器とセットで生産されたものと考えることができ、須恵器製であることにさしてこだわる必要はないかもしれない。煮沸器と同様に北陸型煮沸セットの完成に伴って土師器器種が須恵器に導入された結果として評価したい。

以上から、当窯跡の土器様相は矢田野向山1号窯跡に後続する型式として位置付けられ、その間には様式を画する大きな画期があると考えたい。この画期は平城Ⅱ期の宮都的な新器種・器種組成が導入された矢田野向山1号窯跡段階から地域に根ざす形で定着する段階の画期で、以後存続する環・皿類の完成と以後衰退する高環・盤・短頸壺（肩部の張った形態）・長頸瓶（長頸で肩部の張った形態）の急速な形態変化と減産という形で整理定型化され、以後の須恵器様相を形成する器種組成が定立する画期として位置付けられる。また、これに加え北陸特有の須恵器様相を特徴づける双耳瓶や糸切り技法をもった器種（小型壺・碗）が出現し、北陸型煮沸セットも一層須恵器技法との関連を密にしながら定型化・増産の道をたどる。言わば、この画期は以後9世紀末に変容する須恵器の大きな画期まで主流となる器種組成の形成期として評価することができ、北陸的須恵器様式が形成される大きな画期として位置付けられる。

また、この時期には北陸の中でも窯跡群ごとに地域色を感じさせる器種構成や製作手法が萌芽する状況がみられる。つまり、南加賀古窯跡群（能美窯跡群も含む）での皿類特に有台皿の優位性、各窯跡群での供膳器の作風の差異、能美窯跡群での甕胴部内面格子文叩き、越中での放射状文叩きの偏在性（内堀1988）などで、以後の地域性を決定付ける要素が表面化する。これは各窯跡群での独自の生産活動が行われたことを裏付けるものであり、前述した地域に根ざした須恵器様式につながるものであろう。

しかし、当窯跡の中には奈良時代前半の様相を色濃く残す偏平な蓋環（環蓋Ⅱ，a類、有台環Ⅱ，類）など伝統的器種や器形が残存しており、前代の土器様相を完全に払拭したのではなく、それは当窯跡に後続する箱宮5号窯跡にも一部見られることで、型式の転換は漸移的に行われたであろう。箱宮5号窯跡の評価については、後続すると言っても口径の縮小化や衰退する器種の減産傾向が強まる程度の変化で、別型式として設定できるものとは考えられず、同型式の範疇として扱いたい。つまり、二ツ梨横川1号窯跡をこの型式の古段階、箱宮5号窯跡を新段階として設定したい。

以上の当窯跡の段階を既存の編年案に対比すれば、北陸では吉岡編年（吉岡1983）でのⅡ期、田嶋編年（田嶋1988）でのⅣ期、南加賀編年（望月・福島1988）でのⅣ-1期の古段階、北野編年（北野1988）での7様式に帰属するものとして、平城編年（西1976）でのⅢ期に併行するものとして考えたい。

注

- (1) 重ね焼きの方法については北野氏(北野1988A)と木立氏(木立1988)の考察をもとに分類したもので、1・2・4類が各々北野分類Ⅰ類、Ⅱb類、Ⅱa類、木立分類Aタイプ、Cタイプ、Bタイプに対応する。
- (2) 北野氏が「3様式Ⅰ期には確実にⅡ類が出現しており、Ⅰ類と併存していた」(北野前掲考察)と指摘しているのとおり、当窯跡の段階では確実に柱状に積み上げる方法が出現しているものの、その量は僅少であり、重ね焼き方法の転換期でもその初潮的な段階であろう。また、木立氏(木立前掲考察)の指摘された「Bタイプの重ね焼きは新器種とセットになって導入された」とする形は当窯跡ではあてはまらず、重ね焼き方法が様相の新旧に関連性をもつような偏りは認められない。
- (3) 矢田野向山1号窯跡で2個体、流団No.16号遺跡1・2号窯跡(『小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会1980。「小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会1984)でかなりの量の出土がある。
- (4) 矢田野向山1号窯跡段階で主体を占めた坯身口径14~16cmのⅡ類が次の段階では姿を消し、それを埋める形で、矢田野向山1号窯跡で17~19cmだったⅠ類が16~18cmに、箱宮5号窯跡(大聖寺高校郷土研究室1971)では15~16cmへと縮小し、それに伴ってⅡ類の口径(矢田野向山1号窯跡ではⅢ類)も縮小を見せる。
- (5) 篠原遺跡(田嶋1987)において坯A b類として扱われたもの。
- (6) 矢田野向山1号窯跡で新器種として登場する宝珠鈕をもつ坯蓋は乳頭状を呈するのに対し、当窯跡のものはやや形骸化したものが主体的で、速くに新しい様相が具現化したものとして考えられるが、当窯跡と同型式(やや古く位置付けられる)に入る浅川3号窯跡(出越茂和氏の御好意により実見)では乳頭状の宝珠鈕が多く、南加賀が乳頭状宝珠鈕の長く定着しない地域であった可能性もある。
- (7) 皿類の変化については、矢田野向山1号窯跡段階から当窯跡段階まで、増産や形態の多様化という形で明確な変化をもつものに対し、箱宮5号窯跡への変化は無台皿1類の減少(これによって小型の法量が欠落する)や有台皿1a類の欠落といった新しい様相への集約という形で見られるものの、匠口窯跡群では和気後山谷2号窯跡(中村1985)の段階まで立ち上りの短い無台皿が確実に存在しており、その変化は波状的に進行したものである。
- (8) 矢田野向山1号窯跡段階の無台杯の法量分化は扁平な器形の14~15cmのものを間に挟んで、16cm前後に1群と12~13cmに2群存在しているが、この法量分化は身の深いタイプが欠落しており、有台杯の法量分化と同レベルのものとしては扱えず、宮都的な器種組成の影響によるものとは考えられない。12~13cmのものが当窯跡段階の法量のものに共通している点を考えれば、新しい段階の法量が共存していたと考えるのが妥当かもしれない。
- (9) 双耳瓶は当窯跡段階をさかのぼるものは確認されておらず、この段階でも浅川3号窯跡(出越茂和1988)で僅かに出土しているだけで、その形態についても耳が3つのものが目立っており、定型化したものとは言いがたい。定型化し、主体的な生産を開始するのは9世紀以降であろう。
- (10) 矢田野向山1号窯跡段階では口縁部が細く長く伸び、口頸部長と胴部長の比率が1対1.3程度と口頸部長が胴部長よりも確実に上まっていたものが、当窯跡の段階では口縁部の外反度や胴下部の器高が増し、口頸部長と胴部長の比率が1対1か胴部の方が長い形態へと変化した。確実に磨れて行く感じを受ける。
- (11) 口縁部に突帯を巡らせる形態の変遷については、木立氏の考察(木立1985)に詳しい。
- (12) 内堀信雄氏よりご教示を受けた。
- (13) 県内の出土状況については田嶋明人氏よりご教示を受けた。また、当期の資料としては加賀市篠原新遺跡の資料(小森1978)が知られている。
- (14) 矢田野向山1号窯跡段階の評価について、木立氏(木立・花塚1986)は「Ⅰ₁期にはⅠ₁期から連続する「一器種一法量」の供膳セットと……「律令官人的」供膳セットが併存したと考えたい。わずかな時間差をもつ可能性は否定できないが、2つの土器様式の差は律令制支配に関わる階級・階層差と理解することができる」としており、これを受けて、田嶋氏は「階層による土器組成の区分が定立」(田嶋1987)し、「消費遺跡、生産遺跡にみる組成の2面性」(田嶋1988)が顕在した段階として位置付けている。
これは、二ツ梨一貫山1号窯跡などの「一器種一法量」の蓋坯が矢田野向山1号窯跡段階での前記特徴を

もつ蓋杯と併行関係にあることと、西弘海氏の定義した「律令的土器様式」が「官宦制の発達と、それにかかる大量の官人層の出現とその特殊な生活形態を前提」（西1982）とすることから、官人層に対して農民層の土器群が律令制支配の中では併存するという宮都での重層性の2点を前提としている。

確かに宮都的な器種組成が導入されるとすれば、官人層クラスに急速に取り入れられると思うが、それが偏平な形態となった蓋杯の時期総てにおいて存在していたと思えない。矢田野向山1号窯跡での偏平な蓋杯が二ツ梨一貫山1号窯跡のものと同形的に差異は感じられないものの、無台杯においては宮都的少量分化とは無関係に思われる法量分化を示しており、その中の一群が、次の段階の当窯跡に引き継がれる状況は次の代への過渡の様相として位置付けられないだろうか。つまり、二ツ梨一貫山1号窯跡と矢田野向山1号窯跡の評価については、併行関係に基づいた階層による組成の2面性として評価すべきものではなく、両者を同型式内（矢田野向山1号窯跡は新しい器種組成を示すものの、主体となる器種は二ツ梨一貫山1号窯跡のものであり、奈良時代前半の様相を基本としている）での前後関係として捉え、矢田野向山1号窯跡が官人層に急速に導入された宮都的な土器様式であったとしても、次代への過渡的な段階にあった土器様相であると考えたい。

- (15) 南加賀古窯跡群での皿類の優位性は前述したとおりであるが、これに近接する能美窯跡群（和気後山谷2号窯跡）でも優位性が見られ、3割近く（内有台が3～4割程度）を占めている（中村1985）。この様相はほぼ同じ量比で、奈良時代終末まで見られるものであり、主要器種として安定した生産を行っている。これに対し、北加賀に位置する末窯跡群や河北窯跡群、越中、越後においては上記の様相は見られず、皿類出現期をピークに減産する傾向にある。特に有台皿の減少は著しく、出現期以降は殆ど見られない。

尚、末窯跡群については出越氏よりご教示を受け、河北窯跡群については若緑ヤキノ2号窯跡（西野1985）及び「能登地域の須恵器生産」（折戸・木立1988）を参照した。

- (16) 有台杯の高台の作風とへら削りの有無、環蓋の鉾の形態と折り返し部の作風、無台杯の形態、皿類の形態とへら削りの比率などは各窯跡群で独自の形を示しており、この作風の特徴が以後動長されて、地域色を設定付けて行くものとする。

引用文献

- 内堀信雄 1988 「須恵器製にみられる叩き目文について」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 宇野隆夫 1988 「食器研究と計量の意義をめぐって」 石川県立埋蔵文化財センター市町村職員研修会資料
- 折戸靖幸・木立雅明 1988 「能登地域の須恵器生産」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 北野博司 1988A 「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司 1988B 「用途からみた食膳具の組成とその変化」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 木立雅明 1985 「能美窯跡群の須恵器編年（1）北群」『辰口町湯屋古窯跡』 辰口町教育委員会
- 木立雅明・花塚信雄 1986 「小松市・二ツ梨窯跡採集の須恵器について」『石川考古学研究会誌』29号 石川考古学研究会
- 木立雅明 1988 「須恵器蓋杯の重ね焼き技術の変化」『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 小森秀三 1978 「第四章第二節 古代の集落」『加賀市史 通史上巻』加賀市
- 大聖寺高校郷土研究部 1971 「南加賀古窯址群籍宮地区調査報告」『郷土』8・9 大聖寺高校郷土研究部
- 田嶋明人 1987 「藤原遺跡の土器組成とその特徴 第1節器種分類 第2節古代土器の編年軸設定」『藤原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 出越茂和 1988 「末窯跡群」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（資料編）』 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 中村英洋 1985 「能美窯跡群の須恵器編年（2）南群」『辰口町湯屋古窯跡』 辰口町教育委員会

- 西弘海 1976 「平城宮出土土器の編年とその性格」『平城宮発掘調査報告 Ⅳ』奈良国立文化財研究所
 西弘海 1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考—小林行雄先生古稀記念論文集—』
 西野秀和他 1985 「高松町若緑ヤキノ竊跡」高松町教育委員会
 望月精司・福島正実 1988 「南加賀古竊跡群」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（資料編）』
 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
 吉岡康輔 1983 「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会 石川考古学研究会

おわりに

本発掘調査は、二ツ梨横川1号竊跡の灰原の一部のみであった、以下、その成果をまとめておわりとしたい。

(1) 遺構について

検出された遺構は灰層で、最大約35cmの厚さで残っていた。その範囲は、長さ7.2m、幅5.6mであった。調査区東側が丘陵斜面になっていて、竊本体が存在するものと考えられる。調査した灰層とその竊体の間は用水で切られている。また、その断面観察及び出土遺物より、須恵器竊跡は1基のみであると考えられる。さらに、丘陵斜面には製鉄跡が存在すると考えられるが、その規模は不明である。須恵器竊跡本体及び製鉄跡の詳細は今後の調査を待って再考したい。

(2) 遺物について

出土した遺物は灰原の一部を調査しただけの少ない量であるのに反して、その内容は密度が高く、多くの調査結果をもたらしてくれた。それらのうち3つ挙げるとすれば、第1に矢田野向山1号竊跡と箱宮5号竊跡の間を埋める土器様相の出現によって、南加賀古竊跡群の須恵器編年の流れがスムーズに理解されたこと、第2に地域色が表面化するこの時期にあって、南加賀古竊跡群の特色が提示できたこと、そして第3に北陸型煮沸セットの完成は土師器のみに見られる現象ではなく、須恵器または須恵器生産においても大きな影響を及ぼしたことである。そして、これら多くの成果が得られたと同時に、幾多の問題点が生まれてきた。これらの問題点はここでは触れないが、二ツ梨横川1号竊跡の竊体調査や資料の増加を待って再考の機会が得られればと思う。

最後に、若干の訂正とお詫びをしておきたい。それは、この竊跡の発見は昭和61年度の市内遺跡詳細分布調査によって発見されたものなのであるが、その時の調査報告書（『市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』小松市教育委員会 1987）の中で、筆者は採集資料をもとに和気後山谷2号竊跡段階でもやや新しい様相として位置付け、今回報告の編年観よりも1型式新しく位置付けてしまったことである。このような混乱は分布調査で採集された資料が当竊跡の中でも新しい様相に位置付けられるものが多かった点と有台坏が採集できなかった点に起因するのであるが、これは単なる弁解でしかない。最大の原因は筆者の勉強不足以外の何物でもない訳で、ここに編年観の訂正と混乱を招いたことへのお詫びを申し上げる次第である。

出土須恵器観察表

須恵器色調一覧表

①	灰白色
②	青色味がかった灰白色
③	褐色味がかった灰白色
④	灰色
⑤	暗灰色
⑥	青色味がかった灰色
⑦	青灰色
⑧	暗青灰色
⑨	赤色味がかった灰白色
⑩	赤色味がかった灰色
⑪	赤灰褐色

須恵器胎土一覧表

Ⓐ	白色微砂粒(φ1mm以下)を少量含有(良好な胎土)
Ⓑ	白色微砂粒と黒色粒子を少量含有(良好な胎土)
Ⓒ	白色微砂粒を適量含有(比較的良好胎土)
Ⓓ	白色微砂粒と黒色粒子を適量含有(比較的良好胎土)
Ⓔ	白色砂粒(φ1~2mm)を少量含有(比較的良好胎土)
Ⓕ	白色砂粒と黒色粒子を少量含有(比較的良好胎土)
Ⓖ	白色砂粒と赤色粒子を少量含有(比較的良好胎土)
Ⓗ	白色砂粒を適量含有
Ⓘ	白色砂粒と黒色粒子を適量含有
Ⓚ	白色砂粒を多量含有(粗悪な胎土)
Ⓛ	白色砂粒と小石(φ2mm以上)を少量含有
Ⓜ	白色砂粒と小石と黒色粒子を少量含有
Ⓝ	白色砂粒と小石を適量含有(粗悪な胎土)
Ⓟ	白色砂粒と小石と黒色粒子を適量含有(粗悪な胎土)
Ⓠ	白色砂粒と小石を多量含有(混和材の入っている胎土)

番号	器種	出土地	口径	器高	底径(台径)	胎土色調	焼成	備考
8器1	環蓋	D-7 灰層	11.7	2.5	—	①⑥	良好	外面に自然釉付着
8器2	*	*	12.2	2.1	—	③②	良	外面降灰ゆがみ有
8器3	*	C-6 灰層	12.6	2.2	—	①⑥	良好	外面に自然釉付着
8器4	*	D-8 灰層	12.3	2.3	—	②⑨	やや良	
8器5	*	C-8 灰層	13.8	2.6	—	②④	やや不良	
8器6	*	E-8 灰層	10.4	2.3	—	①②	良	外面降灰土器片付着
8器7	*	D-8 灰層	13.4	2.0	—	④	やや良	ゆがみ有
8器8	*	C-6 灰層	13.0	2.2	—	④⑥	良	
8器9	*	C-7 灰層	13.5	2.0	—	④③	良好	ゆがみ有
8器10	*	D-5-6 灰層	14.4	1.9	—	③⑤	*	外面降灰ゆがみ有
8器11	*	C-6 灰層	14.3	1.6	—	④	良	
8器12	*	B-5 灰層	13.8	2.5	—	①④	良好	外面降灰ゆがみ有
8器13	*	D-7 灰層	14.5	1.5	—	④②	良	
8器14	*	*	13.6	2.0	—	⑦②	良好	
8器15	*	E-7 灰層	13.8	2.0	—	③③	不良	
8器16	*	D-7 灰層	14.6	2.2	—	④②	やや不良	

番号	器種	出土地	口径	器高	底径(台径)	胎土色調	焼成	備考
8器17	環蓋	D-7 灰層	14.8	2.1	—	③③	不良	
8器18	*	B-6 灰層	14.8	1.8	—	③③	良	
8器19	*	D-7 灰層	14.2	1.8	—	④②	*	
8器20	*	E-8 灰層	15.0	1.2	—	④⑦	*	
8器21	*	D-6 灰層	15.0	2.2	—	①⑦	良好	
8器22	*	C-6 灰層	15.0	2.4	—	②⑨	良	
8器23	*	B-6 灰層	16.4	2.6	—	④④	良好	外面に自然釉付着
8器24	*	D-7 灰層	15.0	1.8	—	①④	*	
8器25	*	B-6 灰層	13.7	2.1	—	③④①	良	外面に自然釉付着
8器26	*	D-7 灰層	13.5	2.0	—	④⑥	*	
8器27	*	B-6 灰層	13.3	2.5	—	④④	*	外面降灰
8器28	*	D-7 灰層	14.2	2.6	—	④⑥	やや良	外面降灰ゆがみ有
8器29	*	D-6 黒灰土	13.8 (残存) 1.4	—	—	④④	良	外面降灰
9器30	*	B-5 灰層	13.8	3.3	—	④④	やや良	内外面に降灰面に自然釉付着
9器31	*	E-8 灰層	14.4 (残存) 2.0	—	—	③③	やや不良	

番号	器種	出土地	口径	器高	底径 (台径)	胎土 色調	焼成	備考
9図 32	环蓋	B-6 灰層	—	(残存) 2.6	—	(B) ④	やや 良	
9図 33	*	D-6 灰層	18.0	2.5	—	(B) ⑧	良好	外面に自然 輪付着 ゆがみ有
第9 34	*	E-8 灰層	17.2	3.1	—	(D) ⑥	*	外面に自 然輪付着
9図 35	*	E-7 灰層	19.8	2.9	—	(B) ⑥	*	ゆがみ有
9図 36	*	*	18.8	2.2	—	(D) ④	*	外面に自然 輪付着 ゆがみ有
9図 37	*	A-6 灰層	17.7	3.9	—	(B) ⑦	*	
9図 38	*	E-7 灰層	18.1	4.2	—	(B) ③	不良	
9図 39	有台环	E-8 灰層	10.9	3.8	8.6	(D) ② 一部③	良好	
9図 40	*	D-7 灰層	10.4	3.8	8.2	(B) ⑦	良	
9図 41	*	B-6 灰層	12.3	4.8	9.4	(C) ②	*	
9図 42	*	B-1 D-7 C-4 黒灰土	13.0	4.7	9.9	(D) ④	良好	外面に自 然輪付着
9図 43	*	D-7 灰層	12.9	4.5	10.1	(D) 内⑦ 外④	良	
9図 44	*	D-6-7	13.8	4.4	11.3	(B) ④	*	
9図 45	*	B-6 D-6 灰層	12.8	4.4	9.6	(D) ②	良好	
9図 46	*	D-7 灰層	13.5	4.4	9.9	(B) ④	良	ゆがみ有
9図 47	*	D-6 灰層	12.0	3.7	8.7	(D) ④	*	
9図 48	*	C-6 灰層	13.1	4.3	10.5	(D) ⑧	良好	
9図 49	*	D-6 灰層	12.8	4.1	9.3	(C) ⑥ 一部③	やや 良	
9図 50	*	D-7 灰層	12.6	3.8	8.8	(C) ⑥	良好	
9図 51	*	*	13.0	3.5	9.4	(D) ②	*	一部自然 輪付着
9図 52	*	*	13.6	3.7	10.0	(D) 内① 外④	良	
9図 53	*	C-8 灰層	14.0	3.7	10.8	(D) ⑧	良好	
10図 54	*	C-6 灰層	16.8	7.0	12.2	(B) ⑥	良	
10図 55	*	B-6 C-7 D-7 灰層	17.2	6.8	13.8	(D) ⑦ 一部③	良好	外面に降 灰 ゆがみ有
10図 56	*	C-6 灰層	16.9	5.7	11.3	(A) 内① 外④	良	

番号	器種	出土地	口径	器高	底径 (台径)	胎土 色調	焼成	備考
10図 57	有台环	C-7 灰層	16.2	6.3	12.4	(C) 内⑥ 外⑦	良	
10図 58	無台环	B-7 灰層	12.2	3.6	9.0	(D) ②	*	内面に自然 輪付着 ゆがみ有
10図 59	*	D-7 灰層	12.2	3.2	9.7	(D) ①	やや 良	
10図 60	*	*	12.3	3.2	9.6	(D) ⑤	良	内外面自 然輪付着
10図 61	*	*	12.8	3.4	10.0	(D) ②	*	
10図 62	*	C-6 灰層	12.0	3.4	8.0	(A) ①	やや 良	
10図 63	*	C-5 灰層	12.6	3.4	10.2	(A) ①	良	
10図 64	*	C-6-7 灰層	12.8	3.4	9.8	(B) ⑥	*	
10図 65	*	B-5 黒灰土	12.4	3.2	10.4	(B) ⑤	*	
10図 66	*	D-5 C-5-6 灰層	13.2	3.4	9.5	(C) ⑤	やや 不良	
10図 67	*	C-6 灰層	13 13.2	3.4	8.8	(D) ①①	良	
10図 68	*	D-8 灰層	13.4	3.7	9.9	(C) ⑤	不良	
10図 69	*	C-6 灰層	13.2	3.3	10.2	(D) ④③	やや 不良	
10図 70	*	D-7 灰層	13.6	3.8	10.6	(D) ⑤	不良	
10図 71	*	D-6 灰層	14.0	3.9	9.8	(B) ⑥	やや 不良	ゆがみ有
10図 72	*	D-6-7 灰層	14.0	3.9	10.4	(B) ③	不良	
10図 73	*	C-6 灰層	13.4	3.7	10.5	(C) ⑤	*	
10図 74	*	D-8 灰層	12.6	3.0	9.6	(D) ④	良	
10図 75	*	C-7 灰層	13.0	3.1	9.8	(B) ①	やや 不良	ゆがみ有
10図 76	*	E-7 灰層	13.6	3.1	10.0	(D) ⑦	良	外面に自然 輪付着
10図 77	*	D-5-7 灰層	13.2	2.9	9.4	(A) ①	*	
11図 78	*	C-7 灰層	14.2	3.1	11.6	(B) ④	やや 良	
11図 79	*	E-7 灰層	13.5	2.9	10.0	(C) 内② 外④	良	
11図 80	*	C-6 灰層	14.2	3.1	10.2	(B) ④	*	
11図 81	*	E-8 灰層	12.6	3.6	9.4	(B) ③	やや 不良	
11図 82	*	D-7 灰層	14.5	4.0	10.8	(B) ⑤	不良	
11図 83	*	C-6 灰層	12.6	3.3	8.4	(C) ⑤	やや 良	ゆがみ有 底面にへ う記号

番号	器種	出土地	口径	器高	底径 (台径)	胎土 色調	焼成	備考
11884	無台皿	B-6 灰層	12.4	3.0	9.6	㊦ ㊱	良	
11885	*	C-7 灰層	13.5	3.0	9.8	㊦ ㊱	*	内外面自然 輪付着
11886	無台皿	C-6 灰層	14.0	1.2	13.2	㊦ ㊱	*	
11887	*	C-6 D-7 灰層	14.6	1.2	13.3	㊱ ㊱	良好	自然輪付 着 ゆがみ有
11888	*	C-5 D-5 灰・黒灰	15.1	1.4	14.0	㊱ ㊱	*	
11889	*	E-7 灰層	14.9	1.3	13.6	㊦ ㊱	良	
11890	*	*	15.6	1.6	14.0	㊱ ㊱	良好	内面に有 台杯との 重焼き痕
11891	*	D-7 灰層	15.6	1.5	14.0	㊦ ㊱	良	
11892	*	C-6 灰層	15.0	1.6	14.2	㊱ ㊱	*	
11893	*	C-6-7 灰層	14.8	1.4	14.3	㊦ ㊱	*	
11894	*	C-5 黒灰土	14.7	1.7	12.4	㊱ 内⑦ 外③	*	ゆがみ有
11895	*	B-5 C-5 灰・黒灰	14.3	1.7	13.2	㊱ ㊱	*	
11896	*	C-6 D-7 灰層	15.3	1.9	14.4	㊱ ㊱	やや良	
11897	*	C-6 灰層	14.6	1.8	13.0	㊱ ㊱	良	
11898	*	B-6 灰層	17.1	1.9	16.4	㊱ ㊱	*	
11899	*	B-5 C-6 灰・黒灰	17.8	1.6	16.7	㊱ ㊱	良好	自然輪付 着 ゆがみ有
11899	*	B-5-6 灰・黒灰	16.8	1.5	15.1	㊱ ㊱	不良	
11899	*	B-6 C-6 灰層	18.0	1.8	16.2	㊱ ㊱	*	
11899	*	D-6 灰層	16.2	2.4	15.3	㊱ ㊱	やや良	外面自然 輪付着
11899	*	*	17.0	2.2	15.0	㊱ 内⑨ 外⑩	*	ゆがみ有
11899	*	C-6 灰層	16.3	(現存) 2.2	15.4	㊱ ㊱	良	ゆがみ有
12899	*	E-7 D-7 灰層	14.7	2.1	12.9	㊱ 内② 外④	*	口縁に自然 輪付着 ゆがみ有
12899	*	C-6 灰層	15.3	1.9	13.0	㊱ ㊱	*	
12899	*	D-8 灰層	15.6	2.0	14.0	㊱ ㊱	*	
12899	*	D-7 灰層	15.2	2.1	13.6	㊱ ㊱		外面一部に 砂粒着

番号	器種	出土地	口径	器高	底径 (台径)	胎土 色調	焼成	備考
12899	無台皿	D-7 灰層	15.7	2.2	14.2	㊱ ㊱	良	
12899	*	D-6 灰層	15.4	2.0	14.6	㊱ ㊱	*	
12899	*	D-6-7 灰層	15.9	1.9	13.7	㊱ 内④ 外⑤	良好	
12899	*	D-6 灰層	16.4	2.1	13.9	㊱ 内④ 外⑤	良	
12899	*	*	16.0	2.2	14.0	㊱ ㊱	やや不良	ゆがみ有
12899	*	*	16.2	2.1	15.0	㊱ ㊱	良好	
12899	*	*	16.4	2.3	14.0	㊱ ㊱	やや不良	
12899	*	D-8 灰層	14.7	2.7	12.4	㊱ ㊱	*	
12899	有台皿	C-6 灰層	19.3	3.1	15.9	㊱ ㊱	良	
12899	*	*	21.1	3.1	18.8	㊱ 内④ 外②	*	ゆがみ有
12899	*	C-6 D-E-7 灰層	18.0	3.1	14.2	㊱ ㊱	*	
12899	*	C-5-6 D-E-6 灰層	18.8	3.5	15.8	㊱ 内⑥ 外⑦	良好	ゆがみ若 干
12899	*	D-5-6 7灰層	19.8	3.0	16.0	㊱ ㊱	*	
12899	*	B-5-6 C-5-6 D-6 灰層	21.0	3.3	17.0	㊱ ㊱	*	
12899	*	B-5 C-6 灰層	20.3	2.9	16.8	㊱ ㊱	*	ゆがみ有
12899	*	C-5 D-6 灰層	19.5	3.1	16.3	㊱ ㊱	*	
12899	*	B-6 灰層	20.6	3.8	17.2	㊱ ㊱	良	ゆがみ有
12899	*	C-6 灰層	20.6	3.8	17.2	㊱ ㊱	*	
12899	*	D-7 灰層	21.4	3.3	18.0	㊱ ㊱	良好	障灰有り
12899	*	D-5-6 7灰層	21.5	3.5	17.9	㊱ ㊱	良	
13899	*	C-6 灰層	21.7	4.0	18.4	㊱ ㊱	良好	外面一部 に障灰
13899	*	B・C-6 灰層	22.0	3.5	19.3	㊱ ㊱	*	一部自然 輪付着
13899	*	B-6 灰層	23.2	4.0	19.8	㊱ ㊱	*	ゆがみ有
13899	*	B-5 黒灰土	22.6	3.7	19.6	㊱ ㊱	良	
13899	*	D-7 黒灰土	19.4	4.4	14.8	㊱ ㊱	やや良	ゆがみ有
13899	*	C-6 灰層	20.2	4.6	16.3	㊱ ㊱	不良	

番号	器種	出土地	口径	器高	底径 (台径)	胎土 色調	焼成	備考
1390 13	有台蓋	E-8 灰層	20.8	4.3	16.4	① ①	やや 不良	
1390 13	*	D-7 灰層	22.2	4.6	18.4	③ ③	不良	
1390 13	*	E-7 灰層	21.8	4.7	17.3	③ ③	*	
1390 13	*	D-E-7 灰層	22.7	4.7	16.8	③ ①	*	
1390 13	*	E-8 灰層	22.6	4.4	17.2	② ①	*	
1400 14	高坏	C-5 灰層	21.7	(現存) 4.5	—	③ ③	良好	外面跡灰 ゆがみ有
1400 14	*	C-6 灰層	—	(現存) 8.1	11.3	⑦ 内⑤ 外⑦	良	内面一部 に降灰
1400 14	*	C-6 D-7 E-8 灰層	22.0	(推定) 10.0	—	① ⑦	*	ゆがみ有
1400 14	盤	E-7-8 灰層	28.7	10.9	10.8	⑦ ⑦	良好	若干ゆが み
1400 14	片形鉢	B-4-6 C-5 D-6 黒灰-灰	18.4	18.9	11.6	⑧ 内⑧ 外⑧	*	ゆがみ有
1400 16	*	C-6 灰層	26.5	(現存) 14.9	—	⑥ ①	不良	
1400 16	*	B-6 C-7 灰層	21.0	(現存) 8.6	—	⑦ ⑦①	良好	自然釉及 び砂粒溶 着
1400 17	長盤	D-6 灰層	21.0	(推定) 28.8	(胴径) 21.0	⑦ ⑧③	やや 不良	
1400 18	*	B-6 灰層	20.6	(現存) 10.0	(胴径) 19.4	⑦ ③	*	
1400 18	*	C-7 灰層	19.4	(現存) 7.9	—	④ ④	*	
1500 15	鍋	E-7 灰層	27.8	(現存) 7.5	—	⑤ 内⑤ 外⑥	良	内面に自然 釉付着 ゆがみ有
1500 15	*	D-6 灰層	27.8	(現存) 8.6	—	⑤ 内⑤ 外⑥	やや 不良	
1500 15	小壺	A-B-4 黒灰土	10.9	5.0	6.0	④ ④	良	自然釉付 着
1500 15	*	E-7 灰層	13.8	(現存) 4.0	—	⑦ ⑦	*	
1500 15	蓋壺	B-6 灰層	10.0	(現存) 1.8	—	④ 内④ 外②	良好	外面自然 釉付着
1500 15	短頸壺	C-6 灰層	8.6	(現存) 13.5	(胴径) 10.0	⑤ ⑤	やや 良	外面自然 釉付着
1500 15	*	B-4 黒灰土	11.8	(現存) 4.5	—	④ ④	*	
1500 15	*	B-5-6 D-6 黒灰-灰	8.6	(現存) 5.8	(胴径) 10.0	③ ④④	やや 不良	外面自然 釉付着

番号	器種	出土地	口径	器高	底径 (台径)	胎土 色調	焼成	備考
1500 15	小壺	B-6 灰層	—	(現存) 3.6	—	③ ②	良好	
1500 15	*	D-8 灰層	—	(現存) 4.5	8.0	⑧ ④⑦	*	内面自然 釉付着
1500 15	長頸壺	E-8 灰層	19.5	(現存) 10.2	—	⑧ ③④	やや 良	内面に自然 釉付着
1500 16	*	D-5-6 黒灰土	—	(現存) 10.8	(胴径) 17.6	① ⑤	良	外面に自然 釉付着
1500 16	*	C-6 灰層	—	(現存) 7.3	11.0 16.1	⑦ ④	やや 良	
1500 16	双耳壺	D-7-8 灰層	9.8	(現存) 6.2	—	⑧ ⑤	*	
1500 16	*	B-5 C-5-6 D-5-7 黒灰-灰	—	(現存) 14.9	10.6	⑧ ⑤	良	
1500 16	横瓶	D-8 灰層	11.6	(現存) 4.2	—	① ①	良好	内外面自 然釉付着
1500 16	*	A-D-6 C-5 E-8 黒灰-灰	(胴径) C-5 6.8	(現存) 17.3	(胴径) 27.4	⑧ ④ 一線⑧	やや 良	
1700 17	壺	B-D-6 灰層	(胴径) 12.0	(現存) 16.7	(胴径) 16.6	⑧ ①③	*	
1700 17	*	C-7 灰層	16.0 14.3	(胴径) 28.6	(胴径) 26.8	⑧ 内④ 外④	良	底面に窯 床粘土付 着
1700 17	*	B-C-6 灰層	19.4 14.4	(現存) 29.1	(胴径) 29.2	① ④	良好	内外面に 自然釉付 着 ゆがみ有
1700 17	*	A-B-6 灰層	16.2 13.6	(現存) 17.3	(胴径) 25.1	① ⑦	*	自然釉若 干付着 ゆがみ有
1700 17	*	B-4 灰層	20.7 17.6	(現存) 4.9	—	⑦ ④	良	自然釉付 着
1700 17	*	C-8 灰層	23.5 (胴径) 19.8	(現存) 6.3	—	① ④	良好	
1700 17	*	C-6 灰層	48.2 (胴径) 8.6	(現存) —	—	⑦ ⑥	*	外面に降 灰
1800 18	*	D-6 黒灰土	61.8	(現存) 5.6	—	⑧ ④	*	
1800 18	*	B-C-6 灰層	51.6 (胴径) 39.5	(現存) 13.7	—	① 内④ 外⑦	良	多数の胴 部破片が 存在する が、焼き ゆがみが 著しく復 元不可能
1800 18	甕形土器	C-8 灰層	20.0	(現存) 15.6	—	⑦ ⑦ 一線⑦	良好 (一部) 不良	



遺跡遺景 (分布調査時)



完掘状況 (西より)



完掘状況 (東より)



aライン灰層



3ライン灰層



遺物出土状況



製鉄跡灰層



1



4



6



16



20



25



29



30



35



37



38



40



46



49



52



54



55



64



70



73



75



79



83



93



99



二ツ梨横川1号窯跡灰原出土須恵器



143



145



144



147



148



150



152



155



157



160



161



166



164



167



168



169



175



176正面



176側面

二ツ梨横川1号窯跡

団体営二ツ梨土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 1989年3月31日
発行者 小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地
☎ 0761 (22) 4111
印刷者 塚谷印刷

